

この2年次にわたる取り組みでは、行動体力や運動能力などの面で大きな成果をあげ、特に、サッカー、バスケットボールなどの球技で培われた力が、日常生活のあらゆる場面で、意欲的、主体的に行動する力にまで発展してきている。

教育課程の中で職業科をはじめとする社会参加の課題に応えた教科、領域の比重が大きいことは言うまでもないが、この2年間の取り組みが、それらの課題をも見通したものになることが高等部教育には求められている。青年期を迎えるまでに、よきにつけ悪しきにつけ「でき上がった」からだを矯正しつつ健康を増進し、社会参加にむけてどの様に取り組むべきかが今後の大きな課題となった。

【4】本年度の取り組み

昨年までの運動場面（保健体育、養護・訓練等）に重点をおいた「からだづくり」の取り組みを通して、身体を動かすことの喜びを体得させるとともに、運動技能の向上と促進など一定の成果をあげ教育課程に定着し、3年次の今年度は授業実践の積み上げの中で生徒の変容も顕著となっている。そこで、今年度は、この取り組みを一層充実させつつ、生活場面（職業化、表現化に焦点をあてた職業科、教科的要素をもつ「知的学習」など）での実践に比重を移した取り組みとした。

それは、社会参加を前にした高等部教育の目標を一層具現化しながら、格別「青年期の発達の特徴」に着目し、その特性を生かした教育課程の創造や「授業づくり」を基底にすることの重要性を認識したことによる。

特に「からだづくり」の面では、運動場面で培ってきた力が、生活場面でどのように生かされ発展させられたか、また生活場面の実践では、態度とか技能、集団の中で生きる力といったメンタルなものに着目した取り組みとした点が大きな特徴といえる。

この点では、昨年度から試案として検討を加えて研究授業等では活用してきた「職業科における評価の基準表（試案）」（P173資料編参照）の成案を得るよう努力している。

また、今年度、全校的な取り組みとなった「授業づくり」については、昨年度の研究発表会での渡部（鳥取大学助教授）講演で提起され、実践の基底となった「授業の視点」——①発達と教育の関連（文化的な活動の中で発達の主体は育つ）②教師集団、子ども集団の意図的編成③集団指導と個別指導、④同一教材・複数課題、⑤授業の展開と評価——を全面的に受け止めて討議を加え、生徒が生き生きと活動できる授業や行事の創造に努めてきた。

なお、「授業づくり」をすすめる上で、その授業を効果的にすすめるためには、「学習集団」が個々の生徒の発達課題に対応できるものになっているかどうか重要であり、高等部では、前述したように教育課程編成上で十分な配慮を加えてきたが、授業展開の中でも、生徒の活動量を多くするためのグループ分けに創意をこらしてきた。

また、一人ひとりの発達に応じた教材提起が、青年期に焦点をあてた視点と関連させることで、実践的に主体性や意欲を喚起してきた点は重要である。

これらの点は、基礎集団を重視しながらも、学習集団の編成を工夫することによって可能となったことである。格別、重度・重複といわれてきた生徒たちの活動参加や意欲の向上に資することができたことは今後の研究実践にとって重要な示唆を与えている。

社会参加の形態は多様であってもよい。しかし、学校での学習の中で培われた力を、生徒一人ひとりが社会で生きぬいていける力にまで高めていくことが、私たちのめざす「社会参加」において有効であると考えて実践をすすめてきた。

なお、以下の図は、高等部の研究の構想をまとめたものである。日常の教育実践の成果が研究活動を推進し、生徒一人ひとりの「生きて働く力」にまでたかめたいものである。

図-2 高等部研究の構想図

